

令和元（2019）年度 「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」 （住まい活動助成部門） 中間報告

団体名

ECO village SHELTER project

活動のテーマ

森の循環物語ーバイオマストイレの設置と一体になった里山の森林整備活動

9月までに達成できた事項(箇条書き)

- 森林整備で出た間伐材の皮をむき、トイレ小屋の資材としてストックした。
- 森林整備で出た枝材をウッドチップパーで粉碎し、トイレやコンポスト、土づくりに用いるおがくずを生産した。
- 荒地を耕し、小さな畑を数カ所つくった。野菜や有用植物（藍、へちま、綿など）を育て、収穫したものを食材に野外調理したり、染め体験をしたりなどして環境教育を実施。生ゴミなどはできるだけ畑に戻すようにして、ゴミとは何か、資源とは何かを考え共有するきっかけをつくった。（5月に循環を考えるマーケットを、9月に地球環境について語り合う会を開催）
- 県内のバイオトイレ2社およびバイオトイレ設置の施設2カ所の視察を行い。実際の匂いや、使用状況、メンテナンスについて知ることができた。
- 視察をもとに立地条件に見合ったシステムの導入をみんなで検討し、当初の動物小屋を改修してトイレ小屋にする計画を見直し、畑のエリアにトイレ小屋を新設することにした。動物小屋は物置小屋&エリア看板に改修していく予定。
- 利害関係者である商業施設の経営者らのオーナー会議に出席し、バイオマストイレの設置やそのメリット・デメリットについて説明し、プロジェクト進行について承諾を得られた。

今後の活動予定と令和2年3月末時点の達成予定項目

- 10月にバイオトイレを発注、11月に到着予定。匂いが他の施設に響かないように太陽光パネルで少量の電力を自家発電できるようなシステムを設置する。
- 11月～12月にかけて、雪が降る前にトイレ小屋を制作する。ワークショップ形式で参加者を募る。
- 11月～12月に子どもたちと一緒に落ち葉を集め、たい肥・腐葉土づくりを行う。腐葉土はバイオトイレの用材として、また畑の用土として用いていく。
- トイレを畑のエリアに新設することに計画を変更したため、景観を損なっている動物小屋の改修が難しくなった。そのため、動物小屋を物置小屋に改装したり、エリア看板をつけたり、水道を設置してはどうかという提案が出ている。これらを企画会議で検討し、余力のある限りで改装を行い、エコビレッジを充実させる。

ECO village SHELTER project

森の循環物語

—バイオマストイレの設置と一体になった里山の森林整備活動

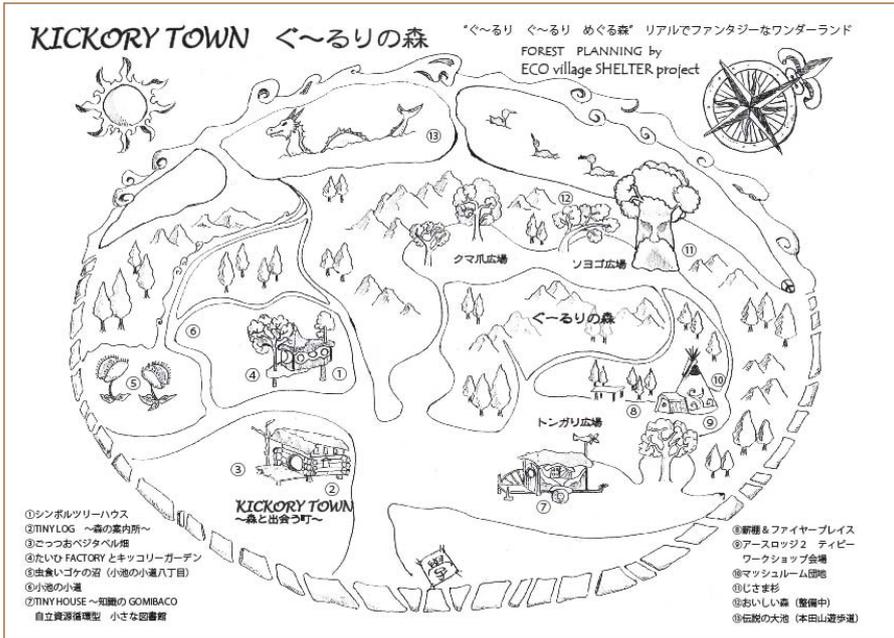


図1 キッコリータウンぐるり森 探検 MAP



図2 商業施設「月岡わくわくファーム」MAP
①直売所、②農家レストラン、③お菓子、④イタリアン
※キッコリータウンは⑤より奥の森のエリア

■助成対象活動に至った理由や背景

・森に出会う町 キッコリータウン

新潟県新発田市月岡にある「森に出会う町・キッコリータウン」は、長年放置されていた森を整備をしながら、そこで出た材を活用し設えてきたエコビレッジです。

有志メンバーによる地道な整備活動により生まれ変わった空間で、2017年秋より里山保育活動「ぐるりの森のこどもえん」を開園するなど、こどもたちが森に親しみ学ぶ機会を創出しています。



写真 ぐるりの森のこどもえんの様子
(左) 薪で沸かした五右衛門風呂
(右上) のびのび木遊び
(右下) みんなで作ったひみつ基地



・トイレの問題とそれぞれの言い分

森への来訪者が増えるにつれ、明るみになったのがトイレの問題です。森のエリアにトイレがないため、これまでは隣接する商業施設のトイレを借用していましたが、①駐車場を越えて移動しなければならないリスクがあること、②一般のお客さんもいて混雑し迷子になること、③トイレに行くたびに付き添いが必要になり活動が分断されること…などから、各方面からトイレ設置を熱望する声が上がりました。

しかし、資金面や利害関係者それぞれの考えが平行線をたどり、なかなか折り合いが付けられぬままでした。

【トイレの設置に関するそれぞれの声から】



当団体

トイレは必要だけど、設備を入れるために掘削するのも森の生き物に負荷がかかる。穴掘りトイレでも問題はないはず…



参加者の保護者

こどもたちが駐車場を越えてお店のトイレに行くのは毎回心配。どんなトイレでもいいから、森にトイレがほしい。



商業施設

お店のトイレを使ってもらってもいいが、混雑する時はちょっと困るな…。汲み取りや穴掘りトイレは苦情が来たら困るな…

環境に負荷をかけずに来訪者・関係者の全員が気持ちよく使える森の中のトイレは…？

森の循環に合うトイレについての学び合い、エコビレッジづくりを一步前進させよう！

■活動の目的・手法

・トイレと暮らし…森の循環を考える

「ご飯を食べる、排泄する、水で流す…あーきれいになった！」…と、いつも気にも留めない一連の流れですが、さて、その後はどうなるのでしょうか？そもそも食べているご飯はどこからきているのでしょうか？

このプロジェクトではそんな問いかけのもと、エリア内におけるバイオトイレ設置までの過程を、「トイレを見つめれば森の循環が見えてくる！」をテーマに、「森の循環物語」と題して、森林整備や畑づくり等の作業と一体となった総合的な環境教育プログラムとして進めていきます。

“トイレ”というみんなの暮らしに欠かせない重要な要素を、それぞれの立場を尊重しながら改めて見つめ直し、そこから森の循環について学び合うことを目的としており、それにより、エコビレッジ構想を共有・推進するコミュニティのさらなる醸成を目指しています。

■9月までの活動の進捗状況

・森の整備で、オガクズ&小屋材の確保



整備風景（間伐・ウッドチップパー）



子どもたちもお手伝いしてくれます



間伐材の皮をむいてストック

・暮らしと土の関係を学ぶ畑作業 WS



へちまの水やり。森に来たみんなで育てます。



収穫作業。みんなでトマトカレーを作りました。

・バイオトイレの視察と計画の見直し



バイオトイレの匂いや設置条件を視察確認。
➡旧動物小屋を改修する計画を変更し、畑のエリアの小屋を新設することにしました。また、太陽光発電を導入し、匂いを飛ばすシステムを入れることにしました

■今後の活動予定

・トイレ小屋の制作とバイオトイレの設置

いよいよバイオトイレの設置です！10月に発注したバイオトイレのシステムが、11月に到着予定です。

現地視察を踏まえ、匂いをこもらせないようにするためには、少量の電力を必要とすることがわかったので、太陽光発電のシステムも取り入れ、設置します。トイレ小屋は、これまでストックした材を使いながら、11月から12月までの間、雪が降る前までに、有志を募りワークショップを交えながら制作していきます。

・落ち葉かきと腐葉土づくり

ぐるりの森の子どもえんや定例整備活動の中で、たい肥置き場をつくり、みんなで集めた落ち葉を入れて腐葉土づくりに挑戦します。

できた土はバイオトイレの用材として利用し、分解されたものをまた畑に返していきます。

これにより、今まで購入していた畑の土や肥料が不要になるため、森とつながる暮らしを実感できるようになります。



写真 落ち葉が大好きな子どもたち（2018年12月）